

中国における民族文化の資源化とポリティクスに関する中間報告

文
塚田誠之

共同研究 ● 中国における民族文化の資源化とポリティクス
—南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究 (2010-2012)

はじめに

共同研究会を立ち上げてから2011年11月までの約1年間に4回研究会を行った。本稿はその中間的な報告である。文化の資源化の方向性は多岐にわたるが、報告された8本のうち4本が観光資源を対象として検討された。ほかには伝統文化、歴史、民族の民間知識が検討された。

観光としての資源化

長谷千代子(九州大)「観光資源としての上座仏教建築—徳宏州の事例から—」は、雲南省徳宏州におけるタイ族の民族文化の観光資源化を検討した。現実に存在している民族文化から観光資源が作り出されるというよりは、観光資源にふさわしいものとして民族文化が上から再創造されるが、民族文化の担い手であるタイ族の人々はそれに単純に迎合してはいない。上からのものは主に政治主導で、観光客がタイ族から連想しやすいタイ王国的な建築様式や古くからの寺院を原状に近い形で維持しようとしたり、仏教建築と自然景観の一体性を重視する方向性が見られる。他方、2005年にある村で再建された寺院は鉄筋コンクリートによるビルマ・シャン州でみられる高床式建築様式を取り入れたもので、近隣の村も模倣した。この村人の建築様式を選択をめぐって、村人と役人との間にせめぎあいが生じたことが論じられた。

孫潔(佛教大)「棚田の資源化—雲南省元陽県における撮影観光を中心に—」は、雲南省元陽県での棚田の撮影観光をめぐって検討した。まず、1960年代から2009年まで写されてきた棚田の写真を取り上げ、時代とともに棚田のイメージが変遷したこと、すなわち1990年代前半までは「棚田を開墾している人々」の写真がもっぱら撮られていたのが、1990年代以降には棚田自体の美しさの写真が撮られるようになった。この過程に並行するかのよう1990年代後半以降、棚田撮影観光ブームが起り、棚田はそれまでの耕作地から撮影スポットになった。棚田の撮影が資源化したことが論じられた。

樫永真佐夫(国立民族学博物館)「ベトナムにおける民族文化の資源化と観光開発—マイチャウとソンラーの事例から—」

は、市場経済化以降、ベトナム各地で観光開発が進み少数民族の観光地が出現するなかで、マイチャウ市のタイ族(白タイ)村とソンラー市のタイ族(黒タイ)村を比較検討した。ソンラーは少数民族観光の成功例で、歴史と地域に根差した真正な民族文化が地域から発信されようとしているのに対して、マイチャウではハノイの旅行会社による企画を取り入れながら新しい民族文化、地域文化が創造されているという違いがあることを論じた。ソンラーがハノイから遠いのに対してマイチャウは近く、複数のアクセスルートがあって地の利がよいという点から観光化にあたって交通の利便性が重要であることも指摘された。

兼重努(滋賀医科大)「行政区画と民族文化資源—西南中国トン族の事例から—」は、広西から貴州省・湖南省に跨って居住するトン族の観光資源について、地域文化として資源化されている現状と諸地域間のせめぎあいを検討した。トン族の観光の目玉である鼓楼・風雨橋の建設競争や「トン族大歌」(アカペラの合唱)の国家級無形文化遺産への申請争いを経て、貴州のトン族大歌がユネスコの世界遺産に認定され、広西側のそれが取り残された。他方、広西側も風雨橋をブランド化

すべくプロジェクトを立ち上げた。貴州の黎平県では鼓楼・トン族大歌などを商標登録申請して独占しようとした。このように、トン族の居住する地方行政区画の間で、観光利用、無形文化遺産登録申請、地域ブランドの立ち上げと商標登録申請をめぐって熾烈なせめぎあいが生じていること、その主体は主に省や県の役人であり、役人が民族全体の利益よりも自らの所属する地域の利益に固執する状況が論じられた。

観光資源は多様であ

り、対象や実態は時代とともに変化する。観光資源が「創造」される場合もある。観光の担い手としては政府が何らかの形で関わるが、せめぎあいが生じている。せめぎあいは長谷報告のように政府と地元民との間の垂直的な場合、樫永報告・兼重報告のように異なる地域・村落間での水平的な場合が見られる。



棚田の撮影観光名所、多依樹(撮影：孫潔)。

伝統文化の資源化

長沼さやか（日本学術振興会特別研究員）「漢民族文化資源としての宗族—国民国家形成とエスニシティの視点から—」は、観光化していない伝統文化について、漢族的な宗族や族譜、年中行事を資源とみなし、広東珠江デルタに居住する水上居民を対象として検討した。定着化してからの時間が短く、経済力が不足していたので、これまで宗族単位での年中行事を行うことができず、漢族社会の周縁的存在とされてきた。しかし、2008年より政府が漢族の年中行事である春節・清明節・端午節・中秋節を全国共通の休日に制定し、それらを伝統文化として推奨し、儀礼の「文明的な」やり方をも合わせて示した。この政府の提示によって水上居民も年中儀礼を行うことが可能になり、漢族の伝統文化を資源化することに成功したことが論じられた。さらに、行事が全国的な休日となったことから、漢族の民族文化よりも上位にある「中華文化」、国民文化形成の可能性が展望された。

歴史の資源化

野本敬（帝京大）「イ族史叙述にみる『歴史』とその資源化」は、イ族史研究が3つの方向性に大別されることを検討した。すなわち、①漢籍史料を基に中国史の文脈から現行の「民族範疇」を再編成する民族史研究、②イ族文字によって書かれた「年代記」資料の漢語対訳の研究だが、漢籍を主体としながらも世界観としてイ文献を援用する、いわば折衷型の研究、③従来の素朴な自民族称揚主義とは一線を画した、イ族自身がイ文歴史文献を素材とし、操作的に編集して漢語で出版し、かつて中国王朝と対峙した「夜郎」の後裔イメージの創出に合目的利用を行う方向である。さらに③は、中国王朝に比肩しうる「歴史／伝統」創出の動きであると同時に、民族文字の伝統の維持が危機に瀕している現在、漢語による歴史の「記録化」「再 positioning」であり、「中華民族」としての「公定史」とはまた位相の異なる地域おこしも見込んだ戦略的な「歴史」の構築と考えられることが指摘された。くわえてイ族研究者の間でのせめぎあいもあり、地域ごとの発掘や「事実」の確定作業がせめぎあいに拍車をかけていることにも言及された。

上野稔弘（東北大）「民族誌的記憶の更新——『中国少数民族問題五種叢書』の改訂をめぐる——」は、1950年代以降の中国における民族研究の一大成果であり、資料的な価値の高い公定の『中国民族問題五種叢書』が21世紀に入って国家民族事務委員会が主導する事業として修訂・再販されたが、その経緯と意義について検討した。改訂は政治的要請が主導的で、学術的需要は必ずしも強くないこと、判型や体裁を統一したことで確かに叢書全体の一体感が出たが、初版本が持っていた特色が大いに減じていること、内容の考証や更新はなされているが、編集方針自体は1990年代以前の形式を踏襲しており、1990年代以降各地で執筆・出版されている民族誌との乖離がとくに叢書のなかの『民族自治地方概況』で顕著であることが論じられた。

民族の民間知識の資源化

稲村務（琉球大）「ハニ族における薬草知識をめぐるポリティクス」は、雲南のハニ族の「伝統的知識」としての薬草について、国家の法制度、知識資源などの大きな枠組みのなかで



村の再建された寺（撮影：長谷千代子）。

検討した。ハニ族の薬草知識は司祭・シャーマンによって口頭伝承で伝えられてきたが、文字のある民族に比べて根拠を示しにくく、地方の標準的な知識としても設定しにくい。体系性が明確でなく、系統的な研究がなされていない。薬草をめぐる法整備については、漢方薬、生物多様性、環境などの法整備が進む中で、中国政府が国際的な生物多様性保護への枠組みとしてのABS法（注）の法制化へ向かっていること、ハニ族の薬草知識が従来は曖昧で境界付けられていなかったが、現在、「民族医学」「民族植物学」の名でブランド化され、パッケージ化され、国際的な基準への対応が求められていることが論じられた。

中間まとめ

これらの報告を通じて、今日の最新の調査に基づく文化の資源化がいかに行進中で、いかなる問題点を抱えているのかを理解することが可能である。また、文化資源をめぐるせめぎあいについては、たとえば長谷・兼重報告から具体的に伝わってくる。さらに、一民族、地域の事例を通して国家の抱えている大きな問題につながる点も見逃せない。たとえば、長沼・野本報告では、国民文化や国家の公定の歴史、国家のなかの地域という問題につながっている。

これまでのところ、文化の資源化に関する諸問題について一層検討と議論が深まり、諸主体間での「せめぎあい」の実態、さらには文化資源と国家との関わりについて提起が積極的になされ、それらを通じて中国的な権力構造や知識人のあり方を解明する本共同研究の目的に沿って順調に行進していると言える。

注：Access and Benefit-Sharing。先住民の伝統知識に基づく新薬開発における利益配分法で、2010年10月に名古屋で開催されたCOP10【生物多様性条約締結会議】においてとくに注目を集めたという。

つかだ しげゆき

民族社会研究部教授。専門は中国南部地域（広西・貴州等）の壮（チワン）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究。編著書に『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北』（有志舎 2010年）、論文に「漢族と非漢族との相互影響について—広西の「蔗園人」の習俗に関する—考察」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』（昭和堂 2012年）など。